

フランスの高等教育

〈フランス〉

夏目達也

私のみた
海外の大学事情

多様な高等教育機関が存在

フランスでは、高等教育は多様な機関によって行われており、高等教育機関イコール大学とはならない。大学は学生数

や教員数などの点では大きな存在であっても、研究機能などの面からみると高等教育機関としての位置は必ずしも大きいとはいえない。

まず、高等教育機関の種類をみてみよう。主なものだけに限っても、以下のよう
に多様である。①大学、②グランゼコール、③技術短期大学部(以下、IUT)、④上級テクニシャン養成課程(以下、STS)、⑤グランゼコール準備級、⑥教員教育大学センター等である。

これらは、長期教育機関と短期教育機関とに大別され、前者には大学とグランゼコールが含まれる。両者とも修業年限はおおむね三年ないしそれ以上となっている。一方、短期教育機関としてはIUTとSTSがある。IUTは大学に付設、STSは高校に付設されており、修業年限は主に二年である。この両機関は、ともに上級テクニシャン(中級技術者)の養成を目的としている。

長期・短期の両機関に区分しにくい機

関として⑤や⑥がある。⑤はグランゼコールへの入学準備の教育を行う機関であり、高校に付設されている。⑥は大学三年修了後に進む教員養成機関である。このほかにも、各種の専門学校などもある。

大学と並ぶ長期教育機関であるグランゼコールには、高級技術者の養成を目的とする技師学校、企業の幹部職員の養成を目的とする商科学校、中等教育や高等教育の教員や研究者等を養成する学校など、多様な種類の学校がある。一口にグランゼコールといっても、教育の目的や水準などはきわめて多様であり、わが国でもよく知られている理工系の最高峰エコール・ポリテクニク(理工科学校)、高級官僚の養成機関であるエナ(国立行政学院)、世界的に著名な研究者・知識人を数多く輩出しているエコール・ノルマル・スベリユール(高等師範学校)などがその頂点に君臨している。しかし、これらのハイレベルの学校は必ずしも多くない。そもそもグランゼコールの定義自体

が明確になっていないほどである。

グランゼコールをはじめとして大学以外の高等教育機関は、いずれも特定の職業分野の人材養成に向けた専門教育を行っている。これに対して、大学は文学・人文、経済、法学、理学、医学等幅広い専攻領域を擁しており、その内容はやや教養主義的な傾向がある。また、大学以外の諸機関はいずれも比較的小規模なのに對して、大学の規模は大きく、高等教育学生総数の約六割が在学している。教員数でも他の教育機関を圧倒している。さらに、国立大学の付設機関であるIUTを除くと、大学以外の諸教育機関には国公立のほか私立も少なくないが、大学はそのほとんどが国立である(大学生の九八%が国立大学に在学)。

大学以外は入学者選抜を実施

さらに、大学は学生の入学方法の点で他の諸教育機関と異なっている。大学

以外の諸教育機関はいずれも入学者選抜を実施しているのに対して、大学は、バカロレアを取得した者を原則として無選抜で入学させている。バカロレアは、中等教育修了と高等教育入学基礎資格を併せて認定する国家資格で、学年末の六月

に行われる試験により取得する。合格率は平均七割程度であり、決して難しいとはいえない。本来が中等教育修了認定の試験であるわけだから、大半が合格できるのは当然といえるかもしれない。つまり、高校で普通に勉強をしていれば修了できるのであり、入学試験なども原則としてないため、大学に入学することもできるのである。問題は「原則として」というところにある。法律には、バカロレアを取得した者は大学に入学できると規定されているが、実際には、以下にみるように入学希望者数が大学の定員を大幅に超過しているうえに、近年ますますその傾向が強まっているため、各大学ともなんらかの形で選抜を実施せざるを得な

い状況になっている。受験者の居住地、バカロレアの種類(普通系と技術系に分かれるが、それぞれ数種に細分化される)や成績などによって入学を制限する大学もある。中には、違法のはずの学力試験を実施する大学もある。

一方、大学以外の教育機関は、書類審査や学力試験などによって入学者選抜を行っているため、バカロレアを取得しただけでは入学できない。とくにグランゼコールの場合には、一般にバカロレアを取得し入学者選抜を経て、まずグランゼコール準備級に入学する。ここで二年間の受験準備教育を受けた後、入学試験を受けてグランゼコールに入学する。上記のような有名グランゼコールに入学するためには、有名準備級に進むことが有利とされており、その入学をめぐる相当に激しい競争が展開される。しかし、本当に厳しいのはその先である。準備級での教育は密度が濃く、競争も厳しい。そのような準備級に進み二年後に無事グラン

ゼコール入学を果たすためには、学力面に優れているだけでなく、厳しい競争やそれに伴うプレッシャーに耐えるだけの精神力と体力も必要とされている。有名なグランゼコール準備級の出身者の何人かに話を聞いてみたが、いずれも準備級の二年間については厳しかったと語り、あまりいい印象をもっていない様子だった。

しかし、グランゼコールの卒業後は、就職やその後の待遇など面でも一般に有利であり、社会的威信の面でも一般に大学よりも高い。そのため、成績優秀な高校生たちは、大学よりもむしろグランゼコール(その前提としての準備級)の方を選択することが一般的になっている。

学生増加で大学の教育条件は悪化

一九八〇年代以降、高等教育では学生数が急増した。その背景には、一九八〇年代半ばに政府が打ち出した高等教育の

拡大策がある。政府は、西暦二〇〇〇年までに後期中等教育最終学年への到達者を同一年齢層の八〇%にまで高めるという目標(以下、八〇%目標と略)を掲げた。また、失業問題が深刻化の中で、就職に有利な高度の資格や、その前提となる高等教育に対する国民の要求が高まったことも一因である。

政府の八〇%目標が発表された一九八四年の同比率は三四%に過ぎなかったが、その後一九八七年に四一%、一九九〇年に五四%、さらに一九九二年には六一%と、わずか五、六年の間に二〇ポイントも増加した(ちなみに一九九九年度は六二・七%であり、目標の実現は事実上無理な状況である)。それに伴い、バカロレア取得者の割合も一九八五年の三〇%程度から急増し、一九九二年には初めて五〇%を超えた。つまり、同一年齢層の過半数がバカロレアを取得するまでになった。これに伴い、高等教育学生も増加し、一九八〇〜九〇年の十年間で約

六十八万人、約六七%もの増加になっている。中でも大学の学生数の増加がめだった。

学生数の増加は、大学にとって頭の痛い問題をもたらしている。その一つは施設・設備の不足や教員不足による教育条件の悪化である。とくに、全国の大学生の約三分が集中する首都圏の大学では、学生数が収容定員の二倍を超える状況である。もともと大学はグランゼコールやIUTよりも教員一人当たりの学生数が多いうえに、政府の予算も不十分である。高等教育全体の予算をみても、フランスは従来から諸外国のそれと比較して低い水準にある。とくに大学の予算は他の高等教育機関よりも少ない。学生一人当たりの経費でみると、大学はグランゼコールの半分以下という状況である。

これらの事情は学生の勉学条件に直接に反映する。大学の教育は主に講義と演習・実験で構成されるが、講義は収容定員を大幅に超えた教室で行われるのは日

常で、教官と学生間のコミュニケーションが成立しにくいのは当然のこと、緊急時の安全確保も危惧されている。大規模校では、受講者を半分にして講義をしようとしても、大教室の不足でそれができない、小教室でも机のない学生がいる、机はあっても椅子が破損で座れない、机も椅子もない学生は教卓の横に座って膝の上にノートを広げて講義を聴く、などの事態もめずらしくないという。

厳しい上級課程への進級

大学は最初の二年間の課程(第一期課程)、次の二年間の課程(第二期課程)、大学院レベルの課程(第三期課程)に分かれており、上級課程に進むには所定の単位を取得しなければならない。第一期課程に在学できるのは三年のみで、三年以内に修了できないと退学になる。実際に第二期課程に進学できるのは入学者の六割にも満たない。残りは他の教育機関に

転学したり、中退することを余儀なくされているのである。

このような結果の背景には、大学が原則として入学者選抜を実施していないため、学生の学力がもともと多様であることに加えて、近年の学生増加に伴う教育条件の悪化も無関係ではありえない。劣悪な教育条件を余儀なくされている学生たちの不満は大きく、一九九〇年以降しばしば全国各地の大学では教育条件の改善を求めるデモやストライキなどの抗議活動が展開されてきたのはむしろ当然の結果とみることもできる。

大学以外の教育機関は、入学者選抜を実施することによって学生数を制限したり、入学者の学力を一定水準以上に確保している。これに対して、大学は入学者選抜の実施が認められず、希望者を原則としてすべて受け入れることになっている。多様な学力の学生を数多く受け入れているうえに、学生一人当たりの経費は他の教育機関よりも低く抑えられている。

る。ごく大ざっぱにいえば、フランスの高等教育は、学業成績の優秀な学生を少数に絞り込んで、恵まれた条件の下で教育する一部の教育機関と、劣悪な条件の下で学力の多様な学生を多数受け入れる大学という二重構造になっている。多くの点で大学は困難な状況に置かれていることは否定できない。

とはいえ、日本人の目から見ると感心することも少なくない。高校で普通に勉強していけば、少なくとも建前は無選抜で大学に入学できる。入学後には学生の勉強や学生生活をサポートするシステムもそこそこには整っている。少額の学生登録料を除き授業料を徴収していないし、住居手当なども支給されている。国立大学といえども年間数十万円もの授業料を徴収するわが国とは大違いである。

なつめ・たつや

東北大学アドミッシヨンセンター